

北方四島における考古・歴史学の総合研究（Ⅰ）

右代啓視・鈴木琢也・東 俊佑・猪熊樹人・天方博章・ザディアコ, A. L.・イワノヴァ, O. B.

Key Words

縄文文化 (Jomon culture)、続縄文文化 (Zoku-Jomon culture)、擦文文化 (Satsumon culture)、オホーツク文化 (Okhotsk culture)、アイヌ文化 (Ainu culture)、竪穴住居群 (Pit dwellings)、チャシコツ (Chashi remains) 学術交流 (Academic exchange)

1 はじめに

北方四島は、日本の北海道東部に位置する国後島、択捉島、色丹島、歯舞群島であり、ロシアとの領土問題を抱えた島々である。このことから北海道からカムチャツカにいたる地域は、日本にとって人類活動史における空白の研究領域となっている。特に、北方四島は、現地での歴史、文化の基礎的データが欠落している地域である。この東の千島ルートは、北海道の先史文化あるいはアイヌ文化研究にとって、北のサハリンルートと同様に北方の歴史、文化を解明する重要な要素をもっている。この東のルートの研究には、歴史的な画期や文化的な特性・変容、過去の自然環境の変遷、自然資源の活用史など、日本における千島列島の歴史、文化の解明の課題がある。特に、北方四島の人類活動史、または歴史、文化の記録と継承が重要な課題となっている。

これまで、筆者らによる千島列島を含めた北方四島の研究は、北海道博物館のメンバーに加え、北方四島の歴史・文化研究に共通する研究課題をもつ、北海道内の博物館関係機関の学芸員などの参加を求め計画的に実施してきた。メンバーの専門は、考古学に加え、歴史学、アイヌ文化などを中心とした研究者である。北方四島側の研究パートナーは国後島古釜布郷土博物館、択捉島紗那郷土博物館の館長や学芸員、研究員、さらに文化施設関係者、南クリル自治区行政政府、クリル自治区行政政府の文化担当者の方々であり、北方四島や日本の歴史・文化にかかわる学術情報を共有し、友好関係を築くため共同調査を実施してきた。

この北方四島には、領土問題をこえた遺跡、史跡などの歴史文化資源が現存し、考古学や歴史学、民族学、民俗学などの学際的な研究はもとより、地域史だけではなく日本史や世界史に展開できる重要な歴史・文化遺産が

存在するからである。これまで、14年間進めてきた北方四島における学術共同調査をまとめると、次のとおりである。

第1期は、戦後半世紀以上の研究の空白を埋めるため、2005年（平成17）～2009年（平成21）にかけ「北方文化共同研究事業」の一環で共同研究に着手した（右代・鈴木ほか 2008・2010）。これは、戦後はじめて歴史・文化（考古学）の研究者が現地調査を実施したことになった。

第2期は、2010年（平成22）～2013年（平成25）にかけて、研究プロジェクト「北方四島の先史文化研究と博物館交流の基礎づくり」として、本格的に「北方四島ビザなし交流」の歴史・文化専門家として認知され継続的に実施した（右代・鈴木ほか 2011・2012・2013・2014・2015）。

第3期は、さらに発展させ2015年（平成27）～2018年（平成30）に総合研究プロジェクトとして「北方四島の考古学研究」を継続化し実施してきた（右代・鈴木ほか 2016・2017・2018・2019）。

第4期として本研究は、新たに2019年（令和元年）から総合研究プロジェクト「北方四島の考古・歴史学の総合研究」として4年計画で実施することとした。このプロジェクトは、北方四島側の研究者との歴史・文化交流、高齢化する元島民の記憶継承など、山積する課題解明のため、第一に北方四島を含めた千島列島の人類活動史を総合的に明らかにすることに大きな視座をおくこととした。したがって、北方四島に現存する歴史・文化資源について北方四島側の研究者と共同で現地調査することで共通の歴史認識をもつことと、元島民の記憶にのこされている歴史・文化遺産の現地調査とその継承を研究対象としている。第二に、このプロジェクトをつうじ、遺跡、史跡などの文化財保存・保護活動やその思想、日本側の

右代啓視：北海道博物館研究部長

鈴木琢也・東 俊佑：北海道博物館 研究部 歴史研究グループ

猪熊樹人：根室市歴史と自然の資料館

天方博章：羅臼町郷土資料館

ザディアコ, A. L.・イワノヴァ, O. B.：国後島古釜布郷土博物館

博物館活動（運営、展示、教育など）、博物館収蔵資料調査など、北海道や日本の歴史認識を深め、両地域の学術的な友好関係を築くことを目的としている。

ここでは、第1期～第3期までの成果の概要を示すとともに、2019年から進める第4期、第1次の共同学術調査について、国後島の現地調査、北方四島側の研究者招聘の共同調査（外務省専門家交流受入事業）の成果を総括的に報告する。また、北海道が主催する択捉島葛参団の同行者として現地を訪問したので、この歴史・文化にかかわる情報を報告する。

2 北方四島の現地調査と研究成果

北方四島の国後島、色丹島、択捉島、歯舞群島の遺跡調査では、国後島94カ所（図1）、色丹島22カ所（右代・鈴木ほか 2015）、択捉島15カ所（右代・鈴木ほか 2019）、歯舞群島の勇留島1カ所（右代・鈴木ほか 2019）の先史文化遺跡を確認した。国後島の遺跡数は、今年度調査で発見した14カ所を加えた数である。これまでの調査で北方四島には、後期旧石器文化、縄文文化、続縄文文化、擦文文化、オホーツク文化、アイヌ文化の遺跡が分布していることを確認した。これらの遺跡や先史文化を検討し総括的にまとめると、各時期の先史文化は連綿と展開していたわけではなく、各文化のなかでも限られた時期にしか遺跡が存在しないことを明らかにした（右代 2014a・2014b）。これらの遺跡は、堅穴住居址やチャシ址などの遺構であり、遺構の平面形状、土器や石器などの散布している遺物の状況などを確認して時期を特定してきた。これまでの研究成果を総括的にまとめると、次のとおりである。

(1) 先史文化の研究成果

①北方四島の先史文化は、北海道島の旧石器文化～アイヌ文化とほぼ同様であり、北方四島に展開していた同一の文化圏であることと、各時期の文化が成熟した時期に北方四島に広がっていたことが明らかになった（右代 2014a、USHIRO 2017）。

②国後島シロマンベツ川河口右岸台地遺跡では、石刃鏃文化の拡がりをもつことを明らかにした（右代・鈴木ほか 2012）。

③石器の素材に使用された黒曜石の産地推定の分析を行い、流通ルートについて検討した。その結果、国後島と色丹島の石器類は、北海道の白滝産、置戸産に限られた黒曜石を素材として使用していたことを明らかにした（右代・鈴木ほか 2016）。

④千島アイヌのテンキの物質文化的な研究では、アリューシャン列島、さらには北米大陸との文化的な交流、

民族的な文化接触で成立した可能性を指摘した（右代・鈴木ほか 2011・2012・2013・2014・2015）。また、現存するテンキを撮影、図化して報告した。

⑤北方四島の調査データを基に、北方四島には、カムチャツカ半島地域の物質文化の影響を受けた遺物がみられることを指摘するとともに、確実に中部千島までは縄文文化晩期、続縄文文化の遺跡が存在すること、さらにオホーツク文化は北千島まで拡がりをもつこと、アイヌ文化ではこの地域に特徴的にみられる内耳土器がカムチャツカ半島南部まで拡がり、チャシコツが北千島まで拡がりをもつことを明らかにした（右代 2014a・2014b）。

⑥10～12世紀の擦文文化集団やトビニタイ土器を使用した集団が北方四島へ進出した背景は、本州からの広域的な物流・交易の展開と資源獲得の影響によるものであることを指摘した（鈴木 2011・2016）。

⑦北方四島の調査データを基に、古代・中世にかけての北方交易のルートを明らかにした（鈴木 2011・2016）。

⑧国後島古釜布大崎東海岸岩面刻画の調査を実施し、その状況を報告した（右代・鈴木ほか 2017）。

⑨古釜布郷土博物館収蔵の考古資料について、収蔵状況について総括した（右代・鈴木 2008、USHIRO and SUZUKI 2018）。

(2) 歴史・文化遺産の現地調査と成果

①色丹島チボイの灯台、日本が1938年（昭和13）に建設した灯台と管理事務所、宿舍など、現状を確認した（右代・鈴木ほか 2013）。

②色丹島斜古丹の日本人墓地の調査を行い、北千島アイヌの「神僕ストロゾコフ・ヤーコフ酋長墓」を確認した（右代・鈴木ほか 2013）。

③色丹島斜古丹に1884年（明治17）に建設された千島アイヌ居住地と、1937年（昭和12）に建てられた千島アイヌ慰霊碑の現状調査を実施し慰霊碑の位置を確認した（右代・鈴木ほか 2014）。現地では慰霊碑本体は確認できなかったが、機会を改め慰霊碑の所在を継続して調査することとしている。

④国後島中部の植内で、戦前の奉安殿跡（植内小学校）や建物基礎などを確認した。

⑤択捉島中部の有萌では、「戸田亦太夫藤原常保墓」とされる石碑の位置を確認した（右代・鈴木ほか 2018）。石碑などは未確認である。この石碑は、文化4年（1807）4月にロシア帝国が内保番屋、紗那幕府会所を攻撃し戦闘になった「文化露寇」に由来する。

⑥択捉島中部振別に江戸時代末期、北方警備の松前藩士の墓が現存している情報を確認した。この墓について

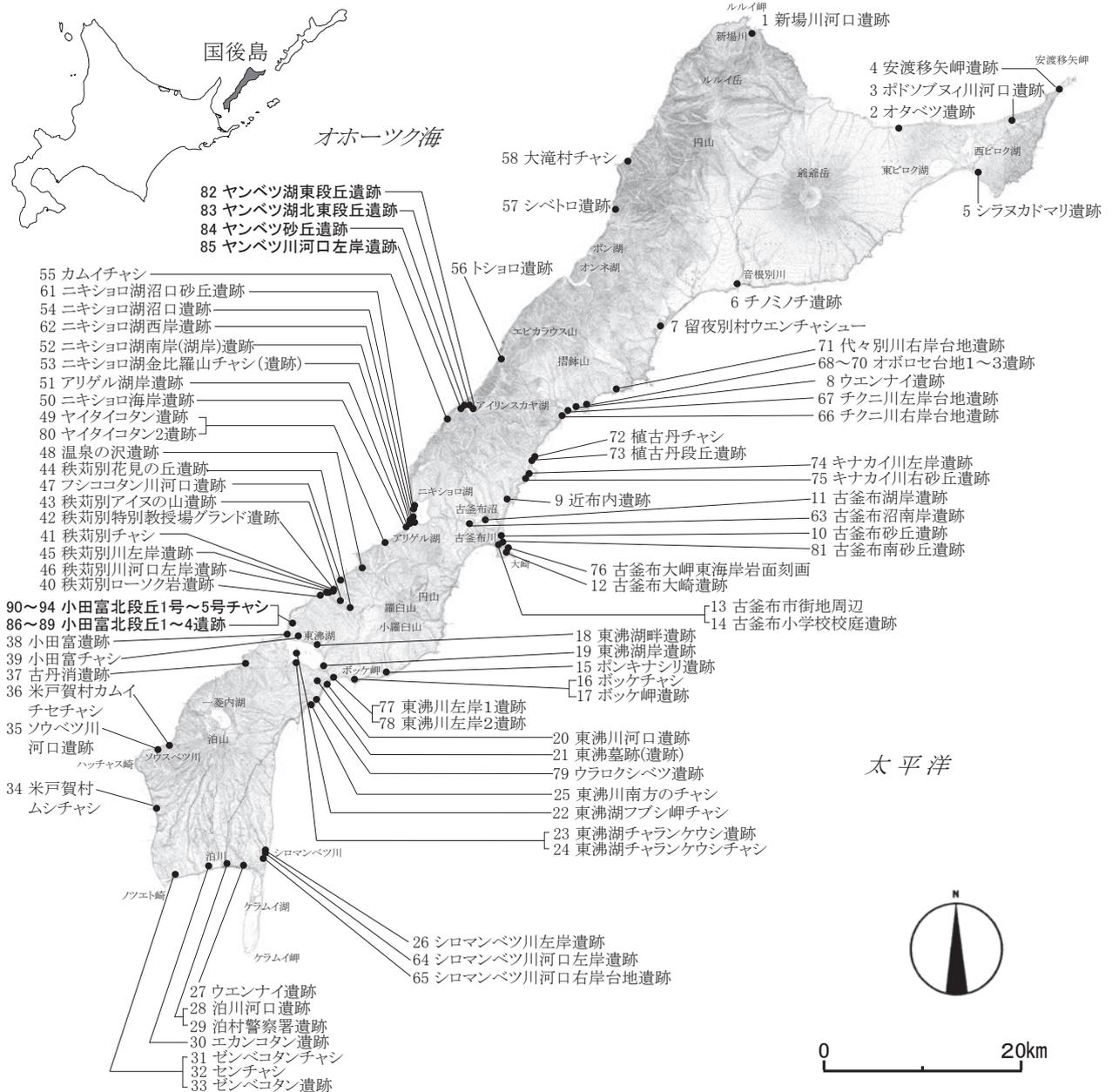


図1 国後島の遺跡分布
 (59:マイアチヌイ川河口遺跡、60:ベスノイマイアチヌイ川河口遺跡は、遺跡の位置を未確認である。国土地理院、数値地図50000 (地図画像)、北方四島の一部を使用)

は、ロシア側の発見者や択捉島元島民の方からの聞き取り調査を実施し情報収集した(右代・鈴木ほか 2019)。現地での墓碑確認調査は、今後の課題である。

これらの歴史・文化遺産については、現地調査の制限や調査期間の制約などがあり、継続し時間をかけ地道に調査しなければならない課題もある。また、北方四島に現存する日本建造物(択捉島紗那尋常小学校校舎、択捉島紗那気象観測所など)については、急速に進むインフラ整備などで取壊される可能性があり、早急に対応を検討しなければならない問題もみられ、現状の記録だけでものこしたいものである。今後の進展を期待し、できるかぎり協力していきたい。

(3) 北方四島との学术交流の成果

①2010年(平成22)より国後島泊小・中学校の児童・生徒は、歴史学習の一環として東沸遺跡の草刈りや現地で先史文化の学習を実施しているとの報告をえている(右代・鈴木ほか 2013・2014)。これは、泊小・中学校イワニシェフ, S. M. [Ivanischev, S. M.] 校長(歴史・郷土史)が学术交流に参加したことで実現したものである。

②国後島古釜布郷土博物館では、小学生を対象とした「郷土史クラブ」が2018年(平成30)に再結成され、2018年の筆者らの訪問に合わせてワークショップを開催し、国後島で採集された遺物を使い先史文化、日本文

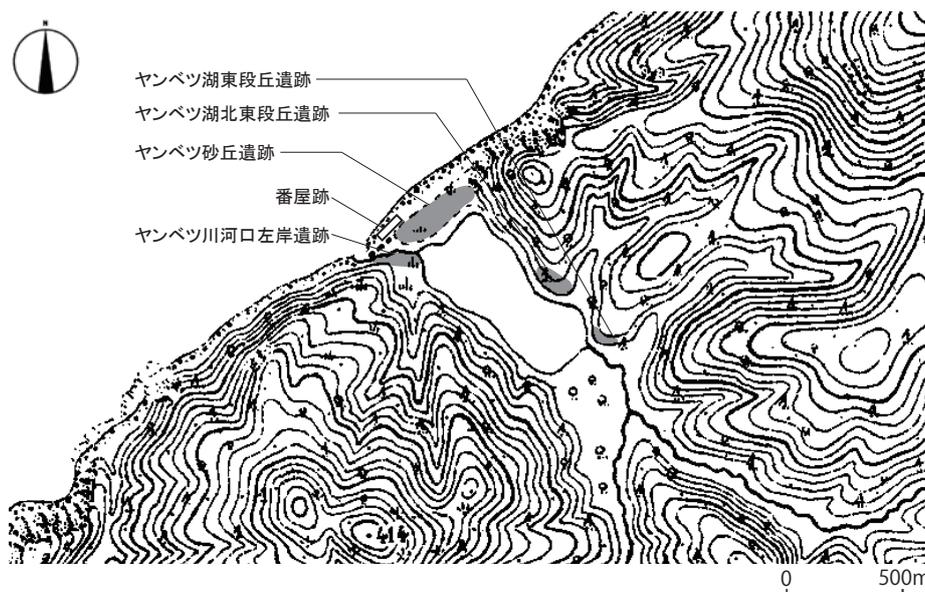


図2 国後島ヤンベツ湖周辺の遺跡分布 (国土地理院、数値地図50000 (地図画像)、北方四島の一部を使用)

化などの歴史学習を行った (右代・鈴木ほか 2019)。

③ 択捉島では、小学生を対象とした「先史文化探検隊」が2017年 (平成29) に結成され、2017年の共同調査の成果を活かした歴史学習や埋蔵文化財保護の活動を実施したとの報告をえている (右代・鈴木ほか, 2019)。これは、択捉島紗那図書館群エフトウシエンコ, N. I. [Evtushenko, N. I.] 館長 (歴史・郷土史) の学术交流への参加によるもので、前紗那郷土博物館研究員のころを含めて3回の参加で、この活動にいたったものである。

これらの学术交流の成果は、北方四島の学术交流を継続して実施してきた大きな成果であり、確実に共通する歴史・文化の認識が深まっているものである。

3 北方四島の2019年の学術調査と成果

2019年の第1次学術調査は、次のとおり実施した。北方四島における現地調査は国後島のみで、当初は択捉島の現地調査を計画したが受入側の都合で実施できなかった。学术交流は、北方四島側の研究者を招聘し、青森市、弘前市、八戸市などで共同調査を実施した。研究の公開事業としては、根室市でシンポジウムを開催した。

(1) 国後島の遺跡調査

この調査は、5月24日～5月26日にかけて、国後島オホーツク海側に位置するヤンベツ湖周辺、小田富周辺の二つ地域で実施した。調査メンバーは、右代啓視、鈴木琢也、猪熊樹人 (根室市歴史と自然の資料館)、天方博章 (羅臼町郷土資料館)、不破理江 (通訳)、多田一平 (外務省) である。国後島古釜布郷土博物館のメンバーは、ザディラコ, A. L. [Zadirako, A. L.] 館長、同館イワノ

ヴァ, O. B. [Ivanova, O. B.] 学芸員、スコヴァティツィーナ, V. M. [Sukovatitsyna, V. M.] 資料管理者 (前館長) である。また、今回の調査地域は、自然保護地域でもあり、クリル国立自然保護区のコズロフスキー, E. E. [Kozlovskij, E. E.] 副区長、ミカヴァ, N. D. [Mikava, N. D.] 研究員、リャガエフ, F. Yu. [Liabgaev, F. Yu.] 研究員の3名が同行し、調査に協力していただいた。

5月24日、根室港琴平岸壁の出港は定刻どおり午前9時30分に「えとぴりか号」で出港、国後島古釜布には午後1時に入港した。入域手続を済ませ、古釜布には午後3時に上陸した。午後3時30分、南クリル自治区行政府ヴラセンコ, V. I. [Vlasenko, V. I.] 区長、アンドレーヴァ, E. I. [Andreeva, E. I.] 第一副区長を表敬訪問し、国後島古釜布郷土博物館との歴史・文化の学術共同調査の受入れに対しての感謝と敬意を伝え、今後の学術共同調査の理解を求めた。この後、昨年4月に仮オープンした国後島古釜布郷土博物館が正式にオープンしたので、新しい展示を視察した。また、今回の学術調査プログラムの日程や内容など、詳細に打合せた。調査地域は、国後島のオホーツク海側に位置するヤンベツ湖周辺、小田富周辺の地域である。この地域は、自動車での移動は困難なため、ニキシヨロ湾からボートで移動し、現地に向かうとのことであった。この地域は、ここ数年にわたり共同調査の希望を提案していた地点であり、今回ようやく実現した。

5月25日、天候に恵まれて晴れ、気温27℃、ニキシヨロ湾からボートで移動し、ヤンベツ湖周辺の調査を実施した。

5月26日、この日も天候に恵まれて晴れ、気温29℃、ニキシヨロ湾からボートで移動し、小田富の北側周辺の



図3 ヤンベツ砂丘遺跡・ヤンベツ川河口左岸遺跡の竪穴住居址群の分布と番屋跡 (●: 現存する日本の電柱)

調査を実施した。

5月27日、午前7時、古釜布港へ移動、出域手続きを行い、午前9時に根室港琴平岸壁に向け出港した。午後1時、根室港琴平岸壁に入港した。現地では、2日間の調査であったが、次のとおり遺跡調査などを実施した。

(2) 国後島ヤンベツ湖周辺の遺跡群

この地域では、4カ所の遺跡とヤンベツ漁場の番屋跡を次のとおり確認した(図1)。また、Samarin・Shubina(2013)が精力的にまとめた国後島と色丹島の遺跡分布調査の報告では、ヤンベツ湖周辺で3カ所の遺跡を確認している。筆者らが確認したヤンベツ砂丘遺跡はイリンスコエ湖1集落〔Poslenie Ozero Iljinskie 1〕、ヤンベツ川河口左岸遺跡はイリンスコエ湖3集落〔Poslenie Ozero Iljinskie 3〕、番屋跡はイリンスコエ湖2構造物〔Oskusstvennoe Soopuzhenie Ozero Iljinskie 2〕と報告している。この報告の記載では、竪穴住居址の数や時期、遺跡と番屋跡の評価などに筆者らの調査と齟齬がみられる。

① ヤンベツ湖北東段丘遺跡

この遺跡は、ヤンベツ湖の東側奥に発達する段丘上、標高20~21mにある(図1-82、図2、表1-3、写真1-1)。遺跡の位置は、北緯44°09′24.03″、東経145°49′17.52″である。この遺跡は、現地での踏査はできなかったものの、国立自然保護区職員の情報により、遺跡の正確な位置や数十軒の竪穴住居址が現存するとの情報をえたもの

である。

② ヤンベツ湖北東段丘遺跡

この遺跡は、ヤンベツ湖の北東側に発達する段丘上、標高23~26mにある(図1-83、図2、表1-3、写真1-2)。遺跡の位置は、北緯44°09′31.41″、東経145°49′05.01″である。この遺跡では、竪穴住居址の平面形がフライパン状の形状を示す長軸8~11mの竪穴住居址9軒の分布を確認した。竪穴住居址の深さは、1~1.5mで比較的深いものであった。時期は、竪穴住居址の形状や規模などから続縄文文化前半と考えられる。

③ ヤンベツ砂丘遺跡

この遺跡は、ヤンベツ湖の海岸側に発達する浜提砂丘上に位置し、浜提砂丘の形成状況からヤンベツ湖は海跡湖であったことがうかがわれる。遺跡は、標高7~9mの浜提砂丘上にあり、一部海岸側と湖畔側で浸食をうけ破壊されている(図1-84、図2、図3、表1-3、写真1-3)。遺跡の位置は、北緯44°09′38.79″、東経145°49′42.23″である。この砂丘上には、133軒の竪穴住居址が密集して分布しており、竪穴住居址の平面形がフライパン状の形状を示すものが主体である。竪穴住居址の規模は、長軸6~10mで、深さ0.5~1mのものである。また、多角形で長軸が10~12m、深さは1~1.5mの竪穴住居址が6軒、点在している(図3)。これらの竪穴住居址の形状や規模などから主体となる時期は続縄文文化であり、その後にはオホーツク文化の時期があることが明らかになった。この竪穴住居址群は、竪穴住居が廃棄されてか

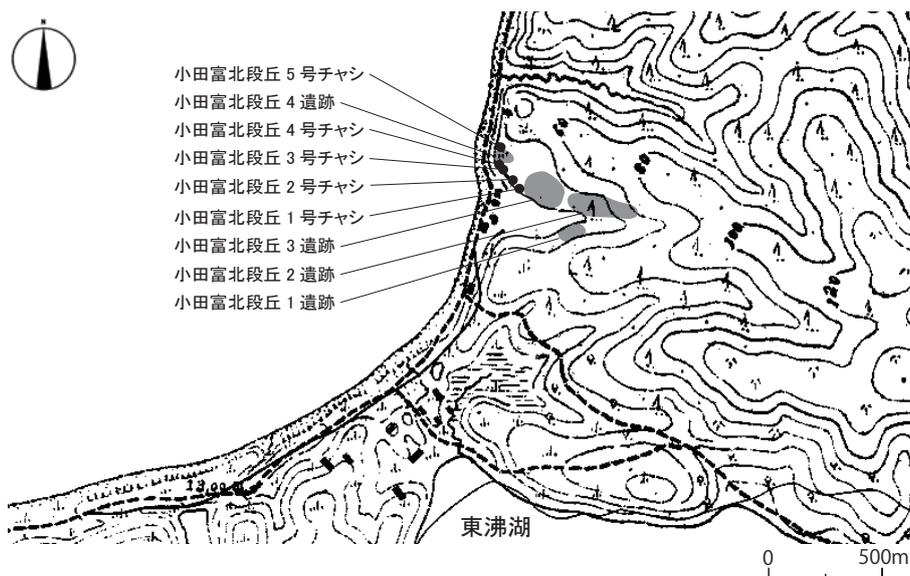


図4 国後島小田富周辺の遺跡分布 (国土地理院、数値地図50000 (地図画像)、北方四島の一部を使用)

ら現在まで、自然に埋積した状態が観察できる貴重な遺跡であり、人的な影響がきわめて少なく奇跡的に現存したものである。

④ヤンベツ川河口左岸遺跡

この遺跡は、ヤンベツ湖の海岸側の北西を流れるヤンベツ川河口の左岸側、標高8～9mにある (図1-85、図2、図3、表1-3、写真1-4)。遺跡の位置は、北緯44°09'33.86"、東経145°48'39.44"である。この遺跡では、堅穴住居址12軒を確認した。この堅穴住居址の平面形は多角形であり、長軸が10～13m、深さが1～1.5mのものである。遺跡は、堅穴住居址の形状や規模などからオホーツク文化の時期のものである。

この左岸遺跡ではオホーツク文化の堅穴住居址が集中して分布しており、ヤンベツ砂丘遺跡にはヤンベツ川河口右岸側と浜堤砂丘上の北東側の一部に点在しているだけである。このことや北海道のオホーツク文化の集落遺跡と比較しても、ヤンベツ川河口左岸遺跡は、大規模なオホーツク文化の集落遺跡である。

⑤番屋跡 (ヤンベツ漁場)

この番屋跡は、ヤンベツ湖の浜堤砂丘の北西側を流れるヤンベツ川河口の右岸上にある (図2、図3、写真1-5)。番屋の位置は、北緯44°09'35.02"、東経145°48'30.65"である。この標高4～5mには、長方形の石積の土塁が海岸と平行に造られ、長軸約85m、短軸約30m、高さ1.5～2m、幅3～1.5mであり、南西の河口側は土塁の倒壊が激しく、石積み土塁の高さが0.5～1mとなっている (写真2-1)。この石積みの土塁には4カ所の出入口と、内部には建造物跡 (基礎) や構造物などの痕跡が地表面から確認できる。土塁の構造は、中心部を土で盛り、この盛土の外側を約50cm大の安山岩の巨礫を積み、崩

れなどを防止するための強化が施されている。土塁の断面は、台形状をなし、土塁の上部は幅0.6～1.2mとなっている。この土塁は、近代的な土木工事ではなく、現地を整理し、現地で調達できる資材等で、工事を行ったことがうかがわれる。例えば、土塁は整理した時の土砂を使用し、土塁を補強した巨礫は海岸にあるものをそのまま使用している。土塁内部には、口径約1.5mの大型鉄鍋が放置されており、著しく錆びた状態で確認した (写真2-2)。この大型鉄鍋は、サケ・マス漁に関連したものと考えられ、この鉄鍋の使用年代を考慮すると番屋の使用時期の決め手となるものの一つである。

また、番屋跡に附属する遺構は、浜堤砂丘上の番屋跡から約500m、東のヤンベツ湖畔側に直線状の石積の土塁がある。規模は長さ約20m、高さ約1.5m、幅約2mであり、堤防状の構築物と考えられるものが現存している (図3)。番屋跡の内陸側の出入口からヤンベツ川に通じるころには、小さな橋が架けられていた痕跡が確認でき、湖の奥に通じる当時の道が現存する。浜堤砂丘の北東側と南側の段丘上の2カ所には、日本で敷設した電柱が現存し、この地域に電気が供給されていたことを物語っている (図3、写真2-3)。

番屋跡の時期は、現地で収集したデータから明治中から昭和はじめころと推定するが、当時の記録、元島民の方々の情報などを収集し検討することとし、今後の課題とする。また、石積みの土塁の倒壊が著しく、早急に詳細な測量や記録、保存・保護をする必要がある。

(3) 国後島小田富北段丘の遺跡群

オホーツク海側に接する国後島小田富の北側に発達する海岸段丘上では、9カ所の遺跡を次のとおり確認した

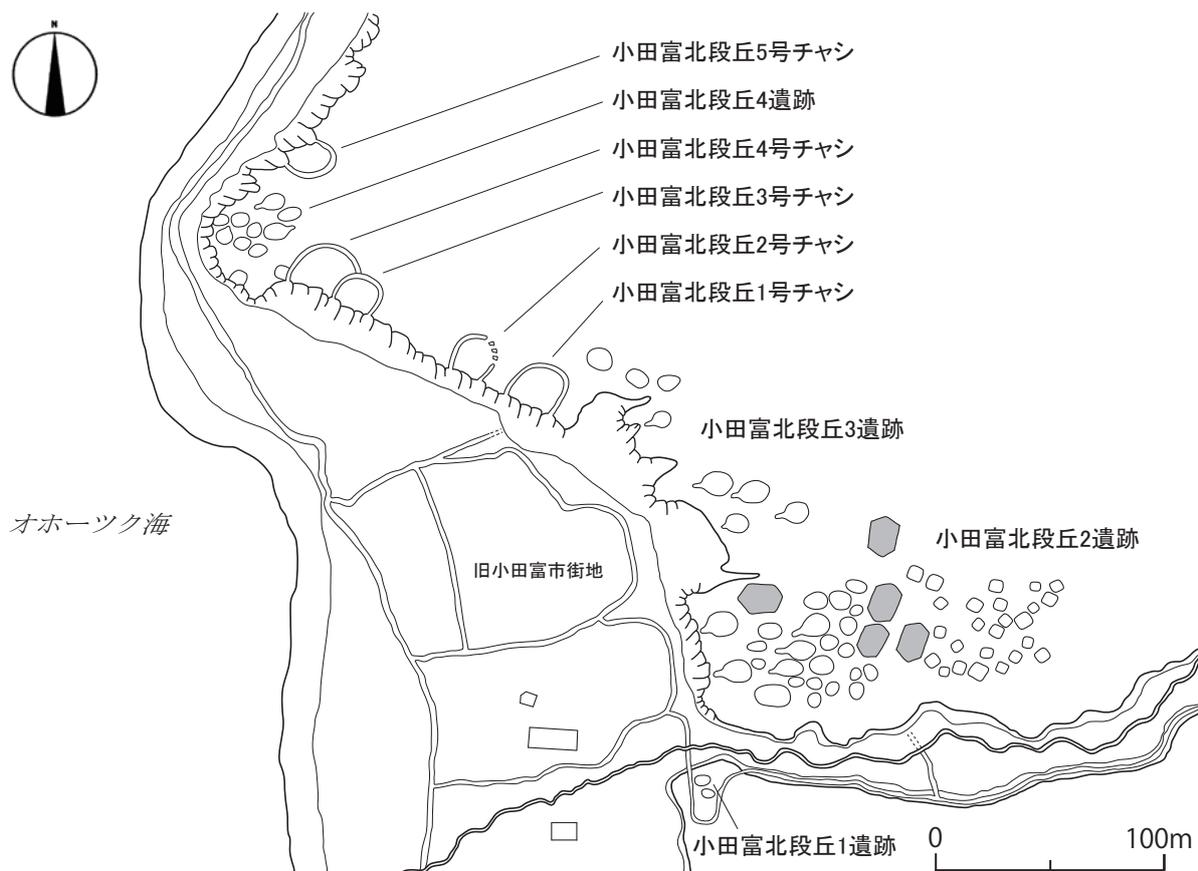


図5 小田富北段丘1・2・3・4遺跡の竪穴住居址群と北段丘1号・2号・3号・4号チャシの分布

(図1)。このうち5カ所は、アイヌ文化のチャシ跡である。

先のSamarin・Shubina (2013) は、小田富周辺でダニロヴォ集落1～5までの5カ所の遺跡を報告している。この内、筆者らが確認した小田富北段丘遺跡群は、ダニロヴォ集落1〔Poselenie Urochishe Danilovo 1〕とダニロヴォ防御集落2〔Ukrepleinoe Poselenie Urochishe Danilovo 2〕である。他のダニロヴォ3～5の遺跡は、今回の調査地域から外れた地点にあり、この他にも遺跡が存在することは村田・本田 (1969) で戦前より知られており多くの遺跡が存在している。Samarin・Shubina (2013) が報告したダニロヴォ防御集落2は、おおまじめに集落遺跡とチャシ跡をとらえて報告している。この報告のダニロヴォ防御集落2でChasi 1としているものは、竪穴住居址との新旧関係でチャシ跡と認定できないものである。先の遺跡も同様であるが、この報告の記載は竪穴住居址の数や時期、遺跡の評価などに筆者らの調査と齟齬がみられる。

①小田富北段丘1遺跡

この遺跡は、小田富の北側に発達する海岸段丘を切るように流れる小河川によって形成された沢の左岸段丘上、標高37～38mにある (図1-86、図4、図5、表1-3、写真2-4)。遺跡の位置は、北緯43°57′16.03″、東経145°35′43.42″である。この遺跡は、平面形が楕円形の竪穴

住居址であり、2軒を確認した。竪穴住居址の規模は、長軸4～5m、深さ40～50cmである。時期は、形状や規模などから縄文文化のものと考えられる。

②小田富北段丘2遺跡

この遺跡は、小田富の北側に発達する海岸段丘を切るように流れる小河川によって形成された沢の右岸段丘上、標高35～37mにある (図1-87、図4、図5、表1-3、写真2-5)。遺跡の位置は、北緯43°57′19.63″、東経145°35′44.76″である。遺跡の規模は小河川側に接する段丘上、面積約7,500㎡にあり、竪穴住居址が多数分布する集落遺跡である。この遺跡では、竪穴住居址の形状や規模などから、段丘の海岸側では縄文文化前半の竪穴住居址24軒、中間部ではオホーツク文化の竪穴住居址5軒、奥部では擦文文化の竪穴住居址25軒の分布を確認した (図5)。この集落遺跡では、「海と川」を意識的に立地環境として選択していたことが、各時期をつうじてうかがえる貴重な遺跡である。

③小田富北段丘3遺跡

この遺跡は、小田富の北側に発達する海岸段丘上、標高33～35mにある (図1-88、図4、図5、表1-3、写真2-6)。遺跡の位置は、北緯43°57′21.08″、東経145°35′39.51″である。この遺跡では、平面形がフライパン状をした8軒の竪穴住居址を確認した (図5)。この規模は、

長軸10～12m、深さ1～1.5mである。また、堅穴住居址の周囲には、ドーナツ状の掘上げ土が地表面から確認でき、土の堆積速度が遅いことがうかがわれる。遺跡の時期は、堅穴住居址の形状や規模などから統縄文文化前半と考えられる。

④小田富北段丘4遺跡

この遺跡は、小田富の北側に発達する海岸段丘上、標高32～33mの北西側端部にある(図1-89、図4、図5、表1-3、写真2-7)。遺跡の位置は、北緯43°57'28.66"、東経145°35'30.64"である。この遺跡では、長軸6～8m、深さ1～1.5mの規模の堅穴住居址11軒を確認した(図5)。また、堅穴住居址が狭い範囲に集中しており、興味深い遺跡である。これらの堅穴住居址の一部には、海岸段丘の崩れで1軒、小田富北段丘4号チャシの北側の壕で破壊された2軒を確認することができる。時期は、堅穴住居址の形状や規模などから、統縄文文化と考えられる。

⑤小田富北段丘1号チャシ

このチャシ跡は、小田富の北側に発達する海岸段丘上、標高31～33mの一番南側に位置している(図1-90、図4、図5、表1-3、写真2-8)。チャシ跡の位置は、北緯43°57'22.76"、東経145°35'37.03"である。このチャシ跡は面崖式であり、壕の外側と内側に土塁もち、海岸段丘の海側に壕開口部を有する。壕内側開口部は21.4mであり、壕内側長軸は23mである。壕は幅3.4m、深さ約2mであり、所によっては壕の深さは約1mのところもある(図5)。現地での確認では、壕を掘るにあたり、箱掘りの穴を等間隔で連続して掘り、これを最終的につなげ、壕の断面をU字状に完成させている。壕の深さが1mのところは、完成にいたっていないことを確認した。また、土塁は壕の掘上げ土を利用し、内側に幅約2m、高さ約0.8m、外側に幅約1.5m、高さ約0.8mの土塁を築造している。壕内部は、平坦に均されている。このチャシは、壕の構築状況から使用されなかった可能性が高く、特に現地での確認の状況やチャシの地域年代からチャシ構築期の終焉を示すものとして指摘できる。土橋は、確認できなかった。

⑥小田富北段丘2号チャシ

このチャシ跡は、小田富の北側に発達する海岸段丘上の小田富チャシ1号に隣接した標高31～32mにある(図1-91、図4、図5、表1-3、写真3-1)。チャシ跡の位置は、北緯43°57'24.15"、東経145°35'35.49"である。このチャシ跡は面崖式であり、壕の外側に土塁もち、海岸段丘の海側に壕開口部を有しているが、壕の内陸側1/4と壕の外側土塁3/4が未完成のまま現存している(図5)。壕内側の規模は、開口部13.2m、長軸14.1mである。完成している壕は、幅3.0m、深さ約1～2mであり、未完成の

1/4部分は箱掘りの穴がそのままの状態で見えている。土塁は壕の掘上げ土を利用し、壕の外側に幅約2m、高さ約1mの土塁を壕開口部北側の1/4のみが築造されて、未完成となっている。壕内部は、平坦に均されている。このチャシは、壕や土塁の構築状況から使用されなかった可能性が高く、特に1号と同様に現地で確認した状況やチャシの地域年代からチャシ構築期の終焉を示すものとして指摘できる。土橋は、確認できなかった。

⑦小田富北段丘3号チャシ

このチャシ跡は、小田富の北側に発達する海岸段丘上、標高32～33mにある(図1-92、図4、図5、表1-3、写真3-2)。チャシ跡の位置は、北緯43°57'26.11"、東経145°35'33.35"である。このチャシ跡は、小田富北段丘4号チャシとつらなって構築され、壕と土塁の観察から同4号チャシよりも同3号チャシの方が新しい。また、壕の内側に土塁もち、土橋も確認できる(図5)。このチャシ跡は面崖式であり、海岸段丘の海側に壕開口部を有する。壕内側の開口部は13.4m、壕内側の長軸は15.6mである。壕の幅は3.8m、深さは約1.2～1.5m、壕の断面はU字状に構築されている。また、土塁は壕の掘上げ土を利用し、内側に幅約1.5m、高さ約0.8mが現存する。壕内部は、平坦に均されている。土橋は、小田富北段丘チャシと接する地点で幅約3m、長さ約5.8mのものが確認できる。

⑧小田富北段丘4号チャシ

このチャシ跡は、小田富の北側に発達する海岸段丘上、標高32～33mにある(図1-93、図4、図5、表1-3、写真3-3)。チャシ跡の位置は、北緯43°57'26.04"、東経145°35'33.48"である。このチャシ跡は、小田富北段丘3号チャシとつらなって構築され、壕と土塁の観察から同3号チャシよりも同4号チャシが古く、壕の内側に土塁を有している。このチャシ跡は面崖式であり、海岸段丘の海側に壕開口部を有する。壕内側の開口部は17.2m、壕内側の長軸は26.1mである。壕の幅は4.0m、深さは約2m、壕の断面はU字状に構築されている。また、土塁は壕の掘上げ土を利用し、壕内側に幅約2.5m、高さ約0.6mが現存する。壕内部は、平坦に均されている。

この小田富北段丘3号チャシと同4号チャシは、つらなって築造されていることから、特殊な例のチャシ跡である。類似例としては、根室半島チャシ群のノツカマップ1号チャシ(川上編 1985)があり、二つのチャシがつらなった面崖式であり、壕の内側に土塁を構築する共通点を指摘しておく。

⑨小田富北段丘5号チャシ

このチャシ跡は、小田富の北側に発達する海岸段丘上の一番北側、標高33～34mにある(図1-94、図4、図5、表1-3、写真3-4)。チャシ跡の位置は、北緯43°57'

表1-1 国後島の遺跡一覧(1)

番号	遺跡名	遺跡の時期								遺構	出土遺物	備考					
		旧石器	縄文草創期	縄文早期	縄文前期	縄文中期	縄文後期	縄文晩期	縄文				オホーツク文化	擦文文化	アイヌ文化		
1	新場川河口遺跡								○	○	○	○	遺物包蔵地	縄文土器、オホーツク式土器、突起付磨製石斧、ナイフ	2006年調査		
2	オタバツ遺跡									○	○	○	遺物包蔵地	宇津内式土器、下田ノ沢式土器、オホーツク式土器、トビニタイ土器	2006年調査		
3	ボドソブヌイ川河口遺跡									○	○		遺物包蔵地	下田ノ沢式土器、オホーツク式土器	2006年調査		
4	安渡移矢岬遺跡												遺物包蔵地	靴形石器、ナイフ、スクレーパー、ドリル	2006年調査		
5	シラヌカドマリ遺跡												竪穴住居址				
6	チノミノチ遺跡(チャシ)												竪穴住居址				
7	留夜別村ウエンチャシ											○	チャシ				
8	ウエンナイ遺跡												竪穴住居址				
9	近布内遺跡									○	○	○	遺物包蔵地	宇津内式土器、下田ノ沢式土器、後北C ₂ ・D式土器、オホーツク式土器、擦文土器、トビニタイ土器	2006年調査		
10	古釜布砂丘遺跡(古釜布アイヌ地)												竪穴住居址	幣舞式土器、三日月形石器	2006、2010、2011、2012、2015年調査		
													竪穴住居址	興津式土器、石匙			
														墓		後北C ₂ ・D式土器、石匙、石槍、石鏃(無柄)、ガラス玉、人骨	
														竪穴住居址		オホーツク式土器	
														竪穴住居址		ガラス玉、小玉(ジャスパー製)	
												貝塚	オホーツク式土器、有角石斧、ガラス製玉				
													遺物包蔵地	北筒式土器、縄文後期土器、幣舞式土器、宇津内式土器、下田ノ沢式土器、後北C ₂ ・D式土器、オホーツク式土器、ナイフ、擦切磨製石斧、突起付磨製石斧、磨製石斧			
11	古釜布湖岸遺跡(古釜布湖付近)											○	竪穴住居址	オホーツク式土器			
12	古釜布大崎遺跡												竪穴住居址		2012年調査		
13	古釜布市街地周辺	○											○	遺物包蔵地	有茎先頭器、宋銭(景德元宝)、鉄鍋、人骨		
14	古釜布小学校校庭遺跡												○	竪穴住居址	蔵手刀(?)		
15	ボンキナシリ遺跡												○	竪穴住居址	オホーツク式土器		
														遺物包蔵地	オホーツク式土器、トビニタイ土器		
16	ボッケチャシ												○	チャシ(塚)			
17	ボッケ岬遺跡													竪穴住居址			
18	東沸湖畔遺跡												○	竪穴住居址	土器、石器、骨		
														遺物包蔵地	縄文土器、宇津内式土器、下田ノ沢式土器		
19	東沸湖岸遺跡(東沸川岸遺跡)													竪穴住居址	縄文晩期土器	2006年調査	
														竪穴住居址	後北式土器		
														竪穴住居址	オホーツク式土器		
														遺物包蔵地	縄文土器、後北C ₂ ・D式土器、擦文土器、トビニタイ土器、石槍、靴形石器		
20	東沸川河口遺跡(東沸遺跡)													竪穴住居址	縄文土器	2006年調査	
														竪穴住居址	オホーツク式土器		
														遺物包蔵地	北筒式土器、宇津内式土器、下田ノ沢式土器、後北C ₂ ・D式土器、トビニタイ土器、靴形石器、突起付磨製石斧		
21	東沸墓址(遺跡)												○	墓	墓標		
22	東沸湖フブシ岬チャシ												○	チャシ(2重の塚)			
23	東沸湖チャランケウシ遺跡												○	竪穴住居址			
														遺物包蔵地	煙管		
24	東沸湖チャランケウシチャシ												○	チャシ(土壘)			
25	東沸川南方のチャシ												○	チャシ(土壘)			
26	シロマンベツ川左岸遺跡													遺物包蔵地	幣舞式土器	2006年調査	
27	ウエンナイ遺跡													竪穴住居址			
														竪穴住居址			
28	泊川河口遺跡(泊遺跡)													遺物包蔵地	北筒式土器、幣舞式土器、宇津内式土器、下田ノ沢式土器、オホーツク式土器、石鏃、ナイフ、ドリル、突起付磨製石斧	2007年調査	
29	泊村警察署遺跡													遺物包蔵地	突起付磨製石斧		
30	エカンコタン遺跡													遺物包蔵地	縄文土器、オホーツク式土器	2010年調査	
31	ゼンベコタンチャシ													○	チャシ(2重の塚)		(ゼンベコタン遺跡)
32	センチャシ(セン砦址)													○	チャシ(2重の塚)		
33	ゼンベコタン遺跡														竪穴住居址		
34	米戸賀村ムシチャシ													○	チャシ		
35	ソウスベツ川河口遺跡(ソウスベツ川)													○	墓	石鏃、人骨、銅銭(穿孔あり)	
															遺物包蔵地	寛永通宝	
36	米戸賀村カムイセチャシ													○	チャシ		
37	古丹消遺跡														竪穴住居址	オホーツク式土器	2006年調査
															遺物包蔵地	縄文土器、宇津内式土器、下田ノ沢式土器、後北C ₂ ・D式土器、オホーツク式土器、擦文土器、石斧、石器	
38	小田富遺跡														竪穴住居址	土器片、銅銭(穿孔あり)、木炭、灰、焼土	2006年調査
															墓	太刀、鐔、装飾品(銀製)、銅銭(穿孔あり)、石鏃	
														遺物包蔵地	幣舞式土器、下田ノ沢式土器、後北C ₂ ・D式土器、オホーツク式土器		
39	小田富チャシ													○	竪穴住居址(方形、3カ所)		
															チャシ(2重の塚)		
40	秩別別ロソク岩遺跡														遺物包蔵地	人骨	

表1-2 国後島の遺跡一覧 (2)

番号	遺跡名	遺跡の時期										遺構	出土遺物	備考			
		旧石器	縄文草創期	縄文早期	縄文前期	縄文中期	縄文後期	縄文晩期	縄文	オホーツク文化	擦文文化				アイヌ文化		
41	秩苅別チャシ												○	チャシ			
42	秩苅別遺跡特別教授場グランド遺跡												○	遺物包蔵地	土器片、太刀、鐔、人骨、銅銭(穿孔あり)、銅銭(清の光緒帝(徳宗)32年、1906年)		
43	秩苅別アイヌの山遺跡													竪穴住居址			
44	秩苅別花見の丘遺跡													竪穴住居址			
45	秩苅別川左岸遺跡											○		竪穴住居址	後北C ₂ ・D式土器	2009、2011年調査	
46	秩苅別川河口左岸遺跡											○		遺物包蔵地	オホーツク式土器	2009、2011年調査	
47	フシココタン川河口遺跡													竪穴住居址		(フシココタン川付近)	
48	温泉の沢遺跡												○	竪穴住居址(方形と円形、計3カ所) 遺物包蔵地	石鏃、黒曜石製石器、太刀		
49	ヤイタイコタン遺跡											○	○	遺物包蔵地	下田ノ沢式土器、鈴谷式土器、オホーツク式土器	2006年調査	
50	ニキシヨロ海岸遺跡											○	○	竪穴住居址 遺物包蔵地	縄文晩期土器群、石製小玉、有柄石鏃 宇津内式土器、下田ノ沢式土器		
51	アリゲル湖岸遺跡(ニキシヨロシブチャリ川付近)											○	○	○	竪穴住居址 遺物包蔵地	縄文晩期土器、石匙、炭、 縄文晩期土器群、宇津内式土器、下田ノ沢式土器、オホーツク式土器、擦文土器、トビニタイ土器、石匙、有柄石鏃、無柄石鏃	2006、2010年調査
52	ニキシヨロ湖岸遺跡(ニキシヨロ湖付近)											○	○	○	竪穴住居址 石塚 遺物包蔵地	オホーツク式土器 有柄石鏃(緑が鋸歯状、赤褐色)、石鏃(黒曜石製) 縄文晩期土器、幣舞式土器、宇津内式土器、下田ノ沢式土器、擦文土器、トビニタイ土器、ドリル、スクレーパー、石鏃、石槍、突起付磨製石斧	2006年調査
53	ニキシヨロ湖金比羅山遺跡(チャシ)												○	竪穴住居址 チャシ(2重の塚)	オホーツク式土器 太刀	2012年調査	
54	ニキシヨロ湖沼口遺跡												○	貝塚 墓	オホーツク式土器、鉄鍋 盤石、人骨	2010、2012年調査	
55	カムイチャシ												○	チャシ			
56	トショロ遺跡													竪穴住居址			
57	シベトロ遺跡					○	○	○	○	○	○	○	○	遺物包蔵地	北筒式土器、縄文後期土器、幣舞式土器、宇津内式土器、下田ノ沢式土器、後北C ₂ ・D式土器、オホーツク式土器、擦文土器、トビニタイ土器	2006年調査	
58	大滝村チャシ												○	チャシ			
59	マイアチヌイ川河口遺跡(地点不明)													遺物包蔵地	ドリル、ナイフ	2006年調査	
60	スベノイマイアチヌイ川河口遺跡(地点不明)							○				○	○	遺物包蔵地	縄文後期土器、後北C ₂ ・D式土器、擦文土器、トビニタイ土器	2006年調査	
61	ニキシヨロ湖沼口砂丘遺跡												○	竪穴住居址、貝塚		2012年調査	
62	ニキシヨロ湖西岸遺跡												○	竪穴住居址		2010年調査	
63	古釜布沼南岸遺跡													遺物包蔵地	剥片(黒曜石)	2010年調査	
64	シロマンベツ川河口左岸遺跡												○	遺物包蔵地	オホーツク式土器	2011年調査	
65	シロマンベツ川河口右岸台地遺跡												○	遺物包蔵地	石刃鏃、つまみ付きナイフ、縄文土器	2011年調査	
66	チクニ川右岸台地遺跡													竪穴住居址(円形1)		2015年調査、縄文	
67	チクニ川左岸台地遺跡													竪穴住居址(円形1)		2015年調査、縄文	
68	オボロセ台地1遺跡												○	竪穴住居址(方形1)		2015年調査	
69	オボロセ台地2遺跡													竪穴住居址(円形3)		2015年調査、縄文	
70	オボロセ台地3遺跡													竪穴住居址(円形1)		2015年調査、縄文	
71	代々別川右岸台地遺跡												○	竪穴住居址(円形7、フライパン形3、方形2)	下田ノ沢式土器、後北C ₂ ・D式土器、石器類	2015年調査、縄文	
72	植古丹チャシ												○	チャシ(塚)		2016年調査	
73	植古丹段丘遺跡												○	竪穴住居址(円形1)		2016年調査、縄文	
74	キナカイ川左岸遺跡												○	竪穴住居址(円形3)		2016年調査	
75	キナカイ川右岸砂丘遺跡												○	竪穴住居址(方形1)		2016年調査	
76	古釜布大岬東海岸岩面刻画													線刻画		2016年調査、明治～昭和	
77	東沸川左岸1遺跡												○	竪穴住居址(方形15)	後北C ₂ ・D式土器、擦文土器、石器類	2016年調査	
78	東沸川左岸2遺跡												○	竪穴住居址(円形42、フライパン形14、六角形2、方形12)	下田ノ沢式土器、剥片(黒曜石)	2016年調査	
79	ウラロクシベツ遺跡												○	竪穴住居址(方形4)		2016年調査	
80	ヤイタイコタン2遺跡												○	竪穴住居址(六角形1)		2016年調査	

表1-3 国後島の遺跡一覧(3)

番号	遺跡名	遺跡の時期										遺構	出土遺物	備考	
		旧石器	縄文草創期	縄文早期	縄文前期	縄文中期	縄文後期	縄文晩期	縄文	オホーツク文化	擦文文化				アイヌ文化
81	古釜布南砂丘遺跡											○	竪穴住居址(円形6)		2018年調査
82	ヤンベツ湖東段丘遺跡												竪穴住居址		2019年調査
83	ヤンベツ湖北東段丘遺跡											○	竪穴住居址(フライパン形9)		2019年調査
84	ヤンベツ砂丘遺跡											○	竪穴住居址(フライパン形127、六角形6)		2019年調査
85	ヤンベツ川河口左岸遺跡											○	竪穴住居址(六角形10)		2019年調査
86	小田富北段丘1遺跡			○	○	○	○	○					竪穴住居址(円形2)		2019年調査
87	小田富北段丘2遺跡											○	竪穴住居址(フライパン形24、六角形3、方形25)		2019年調査
88	小田富北段丘3遺跡											○	竪穴住居址(フライパン形8)		2019年調査
89	小田富北段丘4遺跡											○	竪穴住居址(フライパン形11)		2019年調査
90	小田富北段丘1号遺跡												○ チャシ(塚、土塁)		2019年調査
91	小田富北段丘2号遺跡												○ チャシ(塚、土塁)		2019年調査
92	小田富北段丘3号遺跡												○ チャシ(塚、土塁)		2019年調査
93	小田富北段丘4号遺跡												○ チャシ(塚、土塁)		2019年調査
94	小田富北段丘5号遺跡												○ チャシ(塚、土塁)		2019年調査

31.89°、東経145°35'30.85°である。このチャシ跡は面崖式であり、海岸段丘の海側に壕開口部を有する(図5)。壕内側の開口部は18.5m、壕内側の長軸は19.4mである。壕の開口部南側の崖面に土橋が構築されている。壕の幅は3.3m、深さは約1mであり、壕の断面はU字状に構築されている。また、土塁は壕の掘上げ土を利用し、内側に幅約3m、高さ約0.5mが現存する。壕内部は、平坦に均されている。土橋は、幅約2.5m、長さ約4mである。

この小田富地域は、戦前より多くの遺物や遺跡の報告があるが、詳細な現地調査のデータがない。村田・本田(1969)による戦前の調査報告では、多くの遺跡が分布しており、小田富の海岸から東沸湖まで700mの浜堤砂丘上に竪穴住居が多数あり、アイヌ文化期と思われる墓などがあつたとされている。また、この報告には「オタトミのチャシ」の記載があり、「トーフツ湖西北近くに高い山があり、この山に登れば、トーフツ湖、オタトミ、根室水道を一目で見わたすことができた。この山の斜面に堀が二段あり、頂には竪穴(方形)3個が認められた。深くて形がはっきり残っている。」と記されている。これらは、本調査で確認した東沸北段丘の遺跡群とチャシ跡とは別の地点であり、東沸湖のオホーツク海側に発達する浜堤砂丘上には竪穴住居群、墓などの遺跡があることが理解される。今回の調査では、立入ができなかった地域であり、浜堤砂丘とオタトミのチャシの調査については、今後の現地調査の課題とする。

(4) 択捉島墓参団に同行した調査

この調査は、7月18日～7月20日にかけて、択捉島墓

参団の同行者として、北方四島の歴史・文化の重要性について参加の理解を深めることを目的に加わった。これまで進めてきた学術調査の成果を基に、歴史・文化の記録と継承について元島民の方々と話合う機会となった。この墓参の同行者は、右代啓視、東俊佑である。

択捉島の墓参訪問地は、内保墓地、ウエンバフコツ墓地、ペケンリタ墓地(老門)、オダイベケ墓地(振別)であった。7月19日の墓参当日は、晴れてはいるものの強風のため海上の波が4～6mと高く、上陸できたのはペケンリタ墓地だけであった。したがって、内保墓地とウエンバフコツ墓地、オダイベケ墓地は洋上慰霊となった。ペケンリタ墓地が位置する地域は老門と呼ばれる地域で、1800年(寛政12)5月に近藤重蔵、山田鯉兵衛らが高田屋嘉平直乗の辰悦丸(1,500石)でエトロフ島に渡海し、オイトに会所をはじめて設けた地として知られている。現在は、スキット社(漁業会社)が経営するサケ・マスの加工場が整備されている(写真3-5)。

「えとぴりか号」から小型船で上陸した老門では、墓参受入れのためザリフ・カサートカ社のシュミーヒン、O. V. [Shumikhin, O. V.] 社長の出迎えを受け、スキット社の老門の養殖施設の責任者であるシュタリョフ、S. [Sutarev, S.] 氏も現地に対応してくれた。老門のペケンリタ墓地は、北側に発達する海岸段丘上に位置し、上陸した老門海岸から約0.6kmの地点である。現地では、墓参団と同行者とともに墓標の整備、周辺の草刈りを行い、ここに眠る方々の慰霊と供養をとおこりなく終え、「えとぴりか号」に戻った。老門海岸から小型船で移動する時には、強風で波が高くなり、天候の回復を待つ

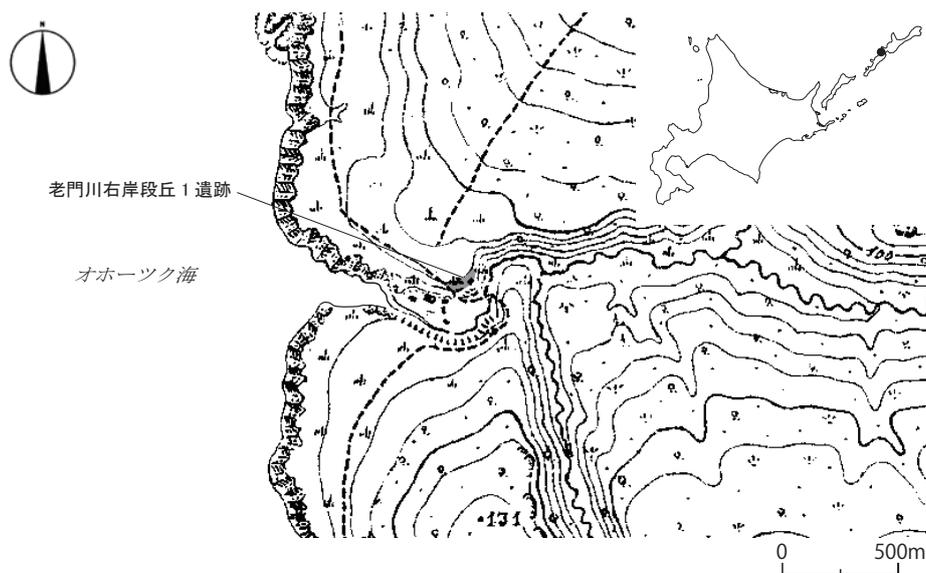


図6 択捉島老門周辺の遺跡分布(国土地理院、数値地図50000(地図画像)、北方四島の一部を使用)

乗船した。

この老門と上陸できなかった振別の地域には、江戸後期末の松前藩士の墓があるとの墓石の写真や現地情報を、すでにシュタリョフ、S.氏からえていた。シュタリョフ、S.氏は、これが何であるかを調べて欲しいと、2018年6月に発見した当時の写真を提供してくれた。この写真の情報から松前藩士の名前と1800年代はじめころの没年が記された墓石数点であることが判明した。また、元島民の一戸幸雄氏からは、振別で暮らした当時の情報をえていた。このことから2018年の択捉島調査で直接、シュタリョフ、S.氏から振別で発見した松前藩士の墓の発見の経緯情報などを収集した(右代・鈴木ほか2019)。2018年の択捉島調査では、発見された墓石の現地調査の実現には至らなかったが、シュタリョフ、S.氏より、現地での調査を再度希望されていた。また、元島民の一戸幸雄氏は、幼少期のころ振別、老門に「侍の墓」があることを鮮明に記憶しており、墓の確認を強く希望していた。

今回、オダイベケ墓地の墓参では、「侍の墓」を確認することも考えていたが、振別には強風のため上陸できなかった。この時、シュタリョフ、S.氏は振別の海岸に先回りして、我々の上陸を待っていてくれた。「侍の墓」の確認調査と慰霊は、機会を改めて行うこととした。

しかしながら、上陸した老門では、海岸からベケンリタ墓地に移動する道沿いで遺跡を発見した。この遺跡については、次のとおりである。

老門川右岸段丘1遺跡

この遺跡は、老門の北側に発達する海岸段丘上の老門川に接した地点、標高25~26mにある(図6、写真3-6)。遺跡の位置は、北緯45°00'34.81"、東経147°31'17.78"

である。この遺跡では、竪穴住居の平面形がフライパン型(3軒)と正方形(5軒)、長軸が7~8m、深さ1~1.5mの規模の竪穴住居址8軒を確認した。また、竪穴住居址が河川沿いの段丘上に狭い範囲に集中して分布していた。これらの竪穴住居址には、河川側の崩れで消失したものもあると考えられる。時期は、竪穴住居址の形状や規模などから続縄文文化前半と擦文文化のものと考えられる。

この択捉島墓参で限られた時間の中、発見できた唯一の遺跡である。現地には、この他にも多くの遺跡や史跡などが、人的な影響を受けず自然のままに遺されていると確信している。

4 北方四島専門家招聘学術交流

この学術交流は、外務省の「ビザなし交流・専門家交流事業」の研究者招聘事業の助成を受け実施したものである。この学術交流の目的は、北方領土問題を越えた共通の歴史・文化の発展と将来に向け両地域の共通の課題を解決するためである。招聘した専門家は、国後島古釜布郷土博物館のザディラコ、A. L.館長(歴史・文化)をはじめ、南クリル中央図書館のソジノヴァ、V. M. [Sozino va, V. M.] 館長、国後島古釜布郷土博物館のイワノヴァ、O. Y.学芸員(歴史・考古)、南クリル自治区区政府文化・スポーツ青少年対策課のジャーカヤ、A. P. [Zharkaia, A. P.] 課長代理(考古・文化交流)、択捉島紗那郷土博物館のグルゾヴィコヴァ、E. A. [Gurzovikova, E. A.] 学芸員(考古・歴史・民俗)である。この学術交流で実施する共同調査は、北方四島の博物館館関係の専門家との歴史・文化交流として実施

しているものである。この調査は、訪問する専門家の要望を受け「青森県における北の縄文遺跡群の史跡整備と博物館調査」をテーマとして実施した。

学術交流の大きな目的は、第一に北海道と北方四島の歴史・文化の認識、第二に歴史・文化遺産(遺跡・史跡など)の整備、保存、活用、第三に博物館の管理・運営と北方四島と関連する資料調査であり、これらを共同調査することで専門的な知識を深めることにより、北方四島の専門家交流の発展に寄与している。

今回の共同調査は2019年(令和元)10月3日~10月8日の6日間であり、第一に世界遺産登録を目指している青森県の縄文遺跡群の整備と関連する博物館などの調査を主目的として、青森県内の史跡・博物館の管理、運営や展示、北方四島に関連する収蔵資料の調査を実施した。

(1) 世界遺産登録に向けた史跡整備の調査

ここでは、北の縄文遺跡群の世界遺産登録に向けた青森県の史跡整備状況や活動を国特別指定史跡「三内丸山遺跡」を中心に国指定史跡「大森勝山遺跡」、国指定史跡「亀ヶ岡石器時代遺跡」、国指定史跡「田小屋野貝塚」、国指定史跡「是川石器時代遺跡」を訪問して調査した。なお、北海道の北の縄文遺跡群は、2016年(平成28)に国指定史跡「大船遺跡」、国指定史跡「垣ノ島遺跡」などを共同調査している(右代・鈴木, 2017)。

①国特別指定史跡「三内丸山遺跡」

この国特別指定史跡では、野外に再現された大型竪穴建物や掘立柱建物、大型掘立柱建物、盛土の土層面、さらに大型掘立柱穴、墓などの遺構保存など、見せる史跡のあり方について調査した(写真3-7)。遺跡内では、解説案内のボランティア活動と、史跡の維持・管理、史跡の保存について調査した。また、ガイダンス施設である「縄文時遊館」では、縄文文化を学ぶための充実した情報の提供や製作された映像などにも強い関心を示し調べた。この史跡を訪れる方々の多さに驚いていた。

②国指定史跡「大森勝山遺跡」

この国指定史跡では、ストーンサークルの史跡整備状況や遺跡までの誘導看板やアプローチ道路などの環境整備などを調査した。また、ガイダンス施設として裾野地区体育文化交流センターに展示されている遺跡出土の遺物などを視察し、展示方法などを調査した。

③国指定史跡「亀ヶ岡石器時代遺跡」と国指定史跡「田小屋野貝塚」

この二つの国指定史跡では、遺跡の立地環境や出土遺物など、特徴ある亀ヶ岡文化や貝塚の特性について現地を調査した。

④国指定史跡「是川石器時代遺跡」

この国指定史跡では、遺跡の立地環境や設置された石

碑などを現地で調査し、出土資料の展示施設である八戸市埋蔵文化センター是川縄文館で出土物や国宝である土偶とその展示法を調査した。

(2) 世界遺産登録に向けた関連博物館の調査

ここでは、青森県立郷土館、つがる市木造亀ヶ岡考古史料室、つがる市縄文住居展示資料館、八戸市埋蔵文化センター是川縄文館で青森県の縄文文化の出土遺物を中心に調べ、各館が連携して進める、北の縄文文化遺跡群の世界遺産登録に向けた活動について調査を行った。これらの施設では、亀ヶ岡文化を代表する出土遺物や多くの土偶について調査を行った。

特に、つがる市縄文住居展示資料館では、木戸奈央子学芸員、小林和樹学芸員と専門的な意見を交わし、復元された縄文文化の竪穴住居の復元について詳細に調査し、縄文文化の特徴、縄文土器の編年や型式、多様な石器の組成、動物遺存体の分析など、専門的な情報を収集した(写真3-8)。また、北方四島の専門家は、世界遺産登録に向けた活動と連携について多くの質問を交わしていた。

縄文文化の展示や考古コレクションの調査では、青森県立郷土館、八戸市埋蔵文化センター是川縄文館を中心に調査した。また、北方四島の専門家は、収蔵している縄文文化の資料群の充実、高度な展示技術に圧倒され、さまざまな考古コレクションの調査を行った。

(3) 史跡・博物館の管理運営と収蔵資料の調査

この調査では、史跡の維持管理、博物館の管理運営や展示、展示資料の調査など、弘前市立博物館、国指定史跡「弘前城」、国指定史跡「陸奥・福島城」、国指定史跡「十三湊遺跡」、市浦歴史民俗資料館、八戸市立博物館、国指定史跡「根城」で、発掘調査方法や史跡の復元方法など専門的な視点で調査を行った。また、史跡の管理体制と行政のかかわりや、史跡と博物館の役割と位置づけについても現地で確認し調査を行った。

例えば、弘前市立博物館と国指定史跡「弘前城」とのかかわり、市浦歴史民俗資料館と国指定史跡「陸奥・福島城」、国指定史跡「十三湊遺跡」のかかわり、八戸市立博物館と国指定史跡「根城」のかかわりなど、国と市町村の行政の関係、史跡と博物館の維持、管理の経費などのガバナンス体制が調査の中心となった。また、伝統的な文化資源を観光として位置づけた青森市の「青森ねぶた会館」、五所川原市の「立佞武多館」などの文化施設で、国指定無形文化財の保存と活用、維持といった総合的な取組みを調査した。

博物館の収蔵資料調査は、青森県立郷土館と弘前市立博物館で行った。北方四島の博物館で所蔵している資料調査であり、漁業資料と民俗資料を中心に名称、使用法、

年代などを調査し、データを収集した。

このように北方四島の専門家との共同調査は、北方領土問題を越えた共通の歴史・文化の発展につながるとともに、将来に向け両地域の共通の課題を解決するための学術交流である。北方四島に現存する歴史・文化遺産をより正しく理解し、公開していくことが重要な役割であることを互いに認識したことは大きな成果であった。

5 シンポジウムの開催

2018年の継続として根室市でシンポジウム「北方四島専門家交流の成果とその役割と課題」を実施した。このシンポジウムは、北方四島専門家グループである歴史・文化系、動植物・生態系、地震・火山系の三つのグループの研究成果公開と北方四島専門家交流の役割と課題について検討することを目的に開催し、一般公開した。また、「北方四島の自然環境や歴史・文化の重要性を次世代に継承して、持続可能な専門家交流の実現を目指す。」ことを大きなテーマとした。このシンポジウムは、北海道立北方四島交流センター「ニホロ」を会場に、主催は北海道博物館と根室市教育委員会、後援は北海道北方領土対策根室地域本部、根室市、(独)北方領土問題対策協会、(公社)北方領土復帰期成同盟、(公財)千島歯舞諸島居住者連盟、根室市北方領土返還要求推進協議会の協力をえて実施した。開催日は、11月9日(午後1時30分～17時30分、参加者100名)である。

根室市教育委員会寺脇文康教育長のあいさつをいただき、趣旨説明は右代啓視が行い進行・司会を務めた。

研究成果の報告では、動植物・生態系、地震・火山系、歴史・文化系の三つの専門家グループから、これまで最前線で現地調査を進めてきた成果を総括的に報告した。報告1は「北方四島における自然生態系」と題し小林万里(東京農業大学教授)が行い、報告2は「北方四島における地震活動の解明」と題し西村裕一(北海道大学大学院理学研究院准教授)が行い、報告3は「北方四島における歴史・文化の解明」と題し鈴木琢也が行った。

この後のパネルディスカッションでは、「北方四島専門家交流の成果とその役割と課題」として、パネラーを小林万里、西村裕一、鈴木琢也、谷内紀夫(松浦武四郎研究会会員)、一戸真幸((公)千島歯舞諸島居住者連盟函館支部 手結の会 理事)が担い、フローワー・コメンテーターを野澤緯三男(松浦武四郎研究会 事務局長)、天方博章(羅白町郷土資料館 学芸員)、猪熊樹人(根室市歴史と自然の資料館 学芸員)、高橋勇人(釧路市埋蔵文化財調査センター 学芸専門員)が担い、会場の参加者を含め大いに意見交換や議論が交わした。コーディネーターは、右代啓視が務め総括した。閉会のあいさつ

は、根室市歴史と自然の資料館餅崎幸寛館長からいただき閉会した。

このシンポジウムの総括としては、1)北方四島の専門家交流総合研究拠点施設の必要性(国立、一元化)、2)自由に訪問できる環境と法的整備の必要性、3)研究機材の自由な持込み(法的整備)、4)分析試料の自由な持出(法的整備)、5)北方四島のリエゾンオフィスの開設(法的整備)、6)研究成果を一般に公開できる博物館施設(国立)、7)北方四島の調査研究費の継続的な確保、8)北方四島交流における専門家グループの積極的な活用など、研究推進のための課題があげられた。

三つの専門家グループが果たす学術的な視点は、次のとおりである。第一に北方四島の歴史・文化では、先史時代からアイヌ文化期、江戸時代、明治維新以降の歴史・文化遺産をできるだけ詳細に記録し、後世に伝えることが重要な視点である。さらに、東の千島ルートとして、カムチャツカ半島を含めた、世界史的な視点で研究を進めることが求められた。第二に北方四島の自然環境や動植物相の生態では、北海道から千島列島からカムチャツカ半島の地域を地球規模で他地域と比較すると、動植物相の生態・環境が何倍も保全され、そこに生息する多様化した動植物の記録と研究を継続して未来につなげる視点が重要であることが求められた。第三に北方四島の地震・火山では、千島海溝に沿う火山や地震の活動様式を調査、研究し自然科学の課題解決だけではなく、災害の規模や防災研究の分野に重要な研究成果を提供できる重要な視点であることが求められた。この三つの研究の視点は、戦後73年経過した現在、北方四島で暮らした方々の「生きた歴史・文化や、それを取り巻く自然環境」をいかに理解し、加速化し未来に継承するかが重要な課題となっている。また、北方四島は最も研究が遅れた地域であり、このシンポジウムをつうじ研究体制を具体化して積極的に、専門家交流の研究を進めなければならことを知っていただく好機となった。

したがって、北方四島において専門家交流が進める研究の役割は、近未来の多様化する社会に直接、生かされる学術的な意義だけでなく、日本や北海道のみならず、世界へ継承すべき大切な人類の遺産としての価値を有するものであることを、このシンポジウムで参加者と共有し、確認できたことは大きな成果であった。この専門家交流の役割と課題の克服、さらに領土問題の解決につながる糸口が見つかることを強く願ってシンポジウムを閉会した。なお、このシンポジウムの詳細については、総括的に別報することとする。

6 おわりに

2019年度(令和元)は、北方四島を中心としたプロジェクト研究の第4期のスタートである。本稿では、本研究の成果と学術交流、公開シンポジウムなどの実施について示してきた。

第1次は、国後島の考古学的調査、択捉島墓参団の同行で現地調査を実施した。また、学術交流では、北方四島在住のロシア人専門家を招聘し、青森県における北の縄文遺跡群の世界遺産登録に向けた史跡整備状況や活動、史跡や博物館、収蔵資料など調査を実施した。

国後島の考古学的調査では、これまで筆者らが未踏査の地域でもあり多くの成果を上げることができた。ヤンベツ湖周辺では、4カ所の遺跡と番屋跡、小田富北段丘周辺では9カ所の遺跡を発見し、縄文文化からアイヌ文化までの基礎的なデータを収集することができた。この第1次調査の当初計画では、択捉島の調査を希望していたが、実施できなかったことは残念であった。しかしながら、択捉島の墓参団に同行でき、歴史・文化の学術調査の重要性を多くの方に知っていただき、上陸した老門で発見した1カ所の遺跡は貴重な基礎データの収集となった。

昨年に引き続き、根室市では、歴史・文化系、動植物・生態系、地震・火山系の専門家によるシンポジウムを開催し、その成果を一般に公開した。また、北方四島での専門家の調査研究活動を多くの方に知っていただく機会となった。このシンポジウムでは、専門家交流に対する意見や指摘をうけ、専門家交流の一元化や成果を還元する博物館的な施設の必要性など、その問題や課題が山積していることが明らかになった。これらを解決するため多くの方々の協力が必要であり、さらなる努力しなければならぬと痛感した。一方、近年の現地調査は制限が厳しくなり、しかも限られた時間のなかで成果を上げることが研究者レベルでは限界を感じているところである。国の強い協力関係がえられなければ、北方四島の専門家交流は進展しないのも事実である。

しかも北方四島に在住するロシア人の方々は、北方四島に現存する先史文化の歴史はもとより、日本の江戸時代、明治から昭和にかけての歴史・文化に強く興味を持っているのも確かである。現状を考えると、北方四島ではロシアの歴史・文化だけではなく、日本の歴史・文化も共通のものとするのが大切である。何もせず現状どおり経年すれば北方四島の歴史・文化遺産は失われてしまい、早急に記録だけでものこすことが日ロ両国にとっても、両国民にとっても、大切な財産となることは間違いないことである。

14年間継続した学術研究または専門家交流は、確實

に成果をあげ北方四島に足跡を残してきた。北方四島の博物館関係の専門家も歴史・文化の重要性を理解し受入れられるようになり、さまざまな課題解決に向けた理解が一層、深まってきている。人的な学術交流はもとより、博物館交流の課題として、歴史・文化の情報の共有化や展示をとおした教育活動、収蔵資料の保存・活用、文化財資源の評価、歴史・文化遺産の整備・活用など、基礎的な整備が重要になってくることは間違いない。これらを、専門家交流で共有化し知的財産とすれば、計り知れない成果が期待できる。

この研究が果たす学術交流は、先のとおり北方四島の歴史・文化遺産の認識を深め、文化財保護活動や博物館活動を推進し共有化することで、北方領土問題の解決に大きく貢献できるものとして期待している。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、択捉島の貴重な情報をご教示いただいた振別出身の一戸幸雄氏、留別出身の三上洋一氏にご協力をいただいた。国後島の現地調査では、博物館関係の専門家はもとより、南クリル自治区行政関係者ならびにクリル国立自然保護区の方々、通訳の木村邦生氏、不破理江氏、外務省欧州局ロシア課課長補佐多田一平氏、外務事務官中村知樹氏、内閣府北方対策室参事官補佐中村耕次氏、事務官塚越英人氏、北方領土問題対策協会の方々にご協力、ご支援をいただいた。また、北海道北方領土対策本部発着領土対策課、北方領土対策根室地域本部、根室市、根室市教育委員会、(独)北方領土問題対策協会、(公社)北方領土復帰期成同盟、(公財)千島齒舞諸島居住者連盟、根室市北方領土返還要求推進協議会などの機関、ならびに関係諸氏には多大なご協力をいただいた。学術交流の専門家招聘では、訪問先のつがる市教育委員会、八戸市埋蔵文化センター是川縄文館の方々にご協力をえた。根室市で開催したシンポジウムでは、根室市、根室市教育委員会をはじめ、後援をいただいた北海道北方領土対策根室地域本部、根室市、(独)北方領土問題対策協会、(公社)北方領土復帰期成同盟、(公財)千島齒舞諸島居住者連盟、根室市北方領土返還要求推進協議会にご協力とご指導をいただいた。

ここに記して、感謝とお礼を申し上げる次第である。

なお、北方四島専門家招聘学術交流は、外務省「ビザなし交流・専門家交流事業」研究者招聘事業の助成を受け実施したものである。また、科学研究費助成金(基盤研究B)「北方四島と千島列島における人類活動史の考古学的研究」(研究代表者:右代啓視)を使用し実施した。

引用・参考文献

- 川上 淳 1985. 根室半島チャシ群環境事業報告書 65. 根室市教育委員会.
- 川上 淳 2001. 千島通史(1)考古学から見た先史時代. 根室市博物館開設準備室紀要 15: 71-93.
- 村田吾一・本田克代 1969. 国後島の遺物. 北海道考古学 5: 87-99.
- Samarin, I. A. ・shubina, O. A. 2013. Pamiatiki istorii i kul'tury Yuzhno-Kuril'skogo Rajona. *Ministerstvo kul'tury Sahalinskij oblasti, Sahalinskij oblastnoj kraevedcheskij Muzej*, Yuzhno-Sakhalinsk: 160.
- 鈴木琢也 2011. 北日本における古代末期の交易ルート. 古代中世の蝦夷世界. pp. 101-118. 高志書院.
- 鈴木琢也 2016. 平泉政権下の北方交易システムと北海道在地社会の変容. 歴史評論 795: 16-27.
- USHIRO, Hiroshi 2017. Study of the History of Anthropogenic Activity on the Kuril Islands and Approach to Solving Problems Existing in the Area. *Circum-pacific Archeology. In the Memory of Igor Yakovlevich Shevkomud*. The Pacific Publishing House "Rubezh", Vladivostok: 407-417
- USHIRO, Hiroshi and SUZUKI, Takuya 2018. Remains of Kunashiri Island—from Research on the Materials Collected in the Yuzhno-Kuril'skij Regional Museum—. *Research Association of Culture in Northern Islands*. Sapporo. No. 13: 39-56.
- 右代啓視 1982. 動物意匠を施した注口・把手付のオホーツク土器. 北海道史研究 30: 52-54.
- 右代啓視 1991. オホーツク文化の年代学的諸問題. 北海道開拓記念館研究年報 19: 23-52.
- 右代啓視・手塚 薫 1991. ウルップ島アリユートカ湾岸出土の遺物. 北の歴史・文化交流研究事業中間報告. pp. 79-86. 北海道開拓記念館.
- 右代啓視 1996. 千島列島採集の考古資料—長尾又六コレクション—. 根室市博物館開設準備室紀要 10: 71-90.
- 右代啓視 2000. 北東アジアにおけるチャシの起源と位置づけ. 北の文化交流史研究事業研究報告. pp. 35-68. 北海道開拓記念館.
- 右代啓視 2014a. 北方四島の考古学的研究. 中華文明の考古学. pp. 409-424. 同成社.
- 右代啓視 2014b. 新・千島紀行—発見された千島列島の先史文化—. 函館市北方民族資料館. 函館市文化・スポーツ振興財団.
- 右代啓視・鈴木琢也 2020. 2019年北方四島学術調査—国後島ヤンベツ・小田富の遺跡群—. 季刊考古学 150: 161-164. 雄山閣.
- 右代啓視・鈴木琢也・山田悟郎・平川善祥・村上孝一・添田雄二・為岡進 2004. 稚内市増幌チャシの地形測量調査報告. 北海道開拓記念館調査報告 43: 67-78.
- 右代啓視・鈴木琢也・山田悟郎・平川善祥・村上孝一・添田雄二・為岡進 2005. 稚内市増幌川口2号チャシの地形測量調査報告. 北海道開拓記念館調査報告 44: 85-102.
- 右代啓視・鈴木琢也・村上孝一・スコヴァティツィーナ, V. M. 2008. 国後島の遺跡—古釜布郷土博物館所蔵資料調査より—. 北方の資源をめぐる先住者と移住者の近現代史—2005-2007年度調査報告—. pp. 161-182. 北海道開拓記念館.
- 右代啓視・鈴木琢也・村上孝一 2010. 国後島における先史文化の資源利用. 北方の資源をめぐる先住民と移住者の近現代史. 北方文化共同研究報告. pp. 125-140. 北海道開拓記念館.
- 右代啓視・鈴木琢也・村上孝一・スコヴァティツィーナ, V. M. 2011. 北方四島の先史文化研究と博物館交流の基礎づくり (I). 北海道開拓記念館研究紀要 39: 99-110.
- 右代啓視・鈴木琢也・村上孝一・スコヴァティツィーナ, V. M. 2012. 北方四島の先史文化研究と博物館交流の基礎づくり (II). 北海道開拓記念館研究紀要 40: 143-154.
- 右代啓視・鈴木琢也・藪中剛司・高島孝宗・村上孝一・スコヴァティツィーナ, V. M. 2013. 北方四島の先史文化研究と博物館交流の基礎づくり (III). 北海道開拓記念館研究紀要 41: 59-82.
- 右代啓視・鈴木琢也・藪中剛司・高橋勇人・村上孝一・スコヴァティツィーナ, V. M. 2014. 北方四島の先史文化研究と博物館交流の基礎づくり (IV). 北海道開拓記念館研究紀要 42: 97-126.
- 右代啓視・鈴木琢也・藪中剛司・高橋勇人・村上孝一・スコヴァティツィーナ, V. M. 2015. 北方四島の先史文化研究と博物館交流の基礎づくり (V). 北海道開拓記念館研究紀要 43: 37-66.
- 右代啓視・鈴木琢也・竹原弘展・スコヴァティツィーナ, V. M. 2016. 千島列島における人類活動史の考古学総合研究 (I) —特に北方四島の先史文化研究を中心に—. 北海道博物館研究紀要 1: 53-72.
- 右代啓視・鈴木琢也・スコヴァティツィーナ, V. M. 2017. 千島列島における人類活動史の考古学総合研究 (II) —特に北方四島の先史文化研究を中心に—. 北海道博物館研究紀要 2: 83-110.
- 右代啓視・鈴木琢也・スコヴァティツィーナ, V. M. 2018. 千島列島における人類活動史の考古学総合研究 (III) —特に北方四島の先史文化研究を中心に—. 北海道博物館研究紀要 3: 163-178.
- 右代啓視・鈴木琢也・高橋勇人・天方博章・野澤緯三男・谷内紀夫・スコヴァティツィーナ, V. M. 2019. 千島列島における人類活動史の考古学総合研究 (IV) —特に北方四島の先史文化研究を中心に—. 北海道博物館研究紀要 4: 37-56.



1 国後島ヤンベツ湖東段丘遺跡



2 国後島ヤンベツ湖北東段丘遺跡の竪穴住居址



3 国後島ヤンベツ砂丘遺跡の竪穴住居址群



4 国後島ヤンベツ川河口左岸遺跡の竪穴住居址



5 番屋跡(ヤンベツ漁場)



1 番屋跡の石積土塁



2 番屋跡土塁内部の鉄鍋



3 日本が敷設した電柱



4 国後島小田富北段丘1遺跡の竪穴住居址



5 国後島小田富北段丘2遺跡の竪穴住居址



6 国後島小田富北段丘3遺跡の竪穴住居址



7 国後島小田富北段丘4遺跡の竪穴住居址



8 国後島小田富北段丘1号チャシの塚と土塁

写真2 国後島の調査



1 国後島小田富北段丘2号チャシの塚と土塁



2 国後島小田富北段丘3号チャシの塚と土塁



3 国後島小田富北段丘4号チャシの塚と土塁



4 国後島小田富北段丘5号チャシ



5 択捉島老門



6 択捉島老門川右岸段丘1遺跡の竪穴住居址



7 国特別指定史跡三内丸山遺跡 (青森県青森市)



8 つがる市縄文住居展示館 (青森県つがる市)

写真3 国後島の調査・択捉島の調査・学术交流調査

Comprehensive Study of Archeology and History in the Four Northern Islands (I)

USHIRO Hiroshi, SUZUKI Takuya, AZUMA Shunsuke, INOKUMA Shigeto,
AMAKATA Hiroaki, ZADIRAKO, A. L. and IVANOVA, O. B.

The Kuril Islands and the Four Northern Islands, which stretch between Kamchatka and Hokkaido, is a region that lacks fundamental data – an empty domain regarding the research of the history of human activity from the Paleolithic culture to the Ainu culture. However, as far as the research of Hokkaido's prehistoric and Ainu culture is concerned, an important factor is that it is clear that like the Sakhalin route to the north, the Kuril route to the east also crossed with different cultures.

Therefore, this research – implemented from 2019 as a four-year plan – was established as a comprehensive project to accomplish new archeological research on the Northern Territories, based the results of research carried out from 2005 to 2018. In order to develop the studies carried out to date, the aim of this research was, firstly, to comprehensively clarify the Kuril Islands' history of human activity and; secondly, to build friendly relations and further deepen museum exchanges and awareness of history in both regions by developing academic exchanges.

In 2019, we held field surveys of the Four Northern Islands, in the vicinities of Lake Yanbetsu and Otatomi, two regions located on the Sea of Okhotsk side of central Kunashiri (Kunashir) Island, and at Oito, a region located on the Sea of Okhotsk side of central Etorofu (Iturup) Island. In the vicinity

of Lake Yanbetsu, we discovered four archaeological sites (Zoku-Jōmon culture to Okhotsk culture), and the remains of one *banya* of a Yanbetsu fishery (mid-Meiji era to early Showa era). In the vicinity of Otatomi, we discovered nine historic sites (Jōmon culture to Ainu culture) atop the coastal terrace on the north side located along the Sea of Okhotsk. These include the remains of five *chashi* of Ainu culture. In the Oito region, while accompanying a grave visit, we discovered one archaeological site dating from Zoku-Jōmon culture to Satsumon culture.

Through academic exchange initiatives which invited experts on the Four Northern Islands, we held surveys of national historic sites and museums under the theme of 'Maintenance of Jōmon Historic Sites and Museum Surveys throughout Aomori Prefecture', and performed studies to share data and deepen historical awareness. In Nemuro, we held a symposium, 'Findings of Academic Exchange between Experts on the Four Northern Islands, and their Roles and Issues', which presented research findings in three groups: history / culture, flora / fauna / ecosystems, and earthquakes / volcanoes. Debates on the roles and surrounding issues of academic exchange between experts on the Four Northern Islands collectively underscored the importance of future exchange between experts.

USHIRO Hiroshi : Director for Research Division, Hokkaido Museum
SUZUKI Takuya and AZUMA Shunsuke : History Studies Group, Research Division, Hokkaido Museum
INOKUMA Shigeto : The Nemuro City Museum of History and Nature
AMAKATA Hiroaki : Rausu Municipal Museum
ZADIRAKO, A. L. and IVANOVA, O. B. : Yuzhno-Kurilsk Regional Museum
